



## 1. 29 社会の中での産科医療

産婦人科部長  
北川 浩 明

1.29 という数字を覚えていらっしゃるでしょうか。6月に発表された昨年のわが国の合計特殊出生率のことです。この数字は、「一人の女性が一生涯に産む子供の数」を表しています。世の中の半数は男性ですので、社会の人口を維持するには合計特殊出生率が最低2.0である必要があります。平成元年に「1.57ショック」と言われましたが、その後も低下傾向は止まらず、ついに1.3を下回るようになりました。もはや諦めのムードが漂っていて、マスコミ的には大きな話題とはなりませんでしたが、社会の行く末は少子化の次に来る人口減少です。

1.29の原因は複合的な要素が考えられますが、その一つに出産・育児に対して女性が魅力を感じなくなったことが挙げられるでしょう。戦後の平等社会で女性は社会人として正しく評価され活躍の場が広がりましたが、その反面専業主婦への評価は低く、育児中の女性に対する社会制度や配慮もまだまだといわざるを得ません。また、女性の育児への自信のなさも1.29に貢献していると考えられます。このような少産の時代だからこそ、次世代を担う子供たちの出生は大切にしたいものです。私たち社会保険中央総合病院の産科チームも、助産師、看護師、小児科の医師と連携を取りながら、新しい病院産科医療の姿を求めて挑戦を続けています。

昨今、「安全で快適なお産」を求める声が医療関係者の間からも聞こえてきます。安全への努力は必要ですが、「お産は楽だったがそのあとの育児は地獄・・・」では何にもなりません。お産は楽しいことではあっても、決して楽なものではありません。考えてみれば世の母親たちは、昔からお産を体験することで自分のからだに向き合い、潜在していた自らの力を実感して育児に対する自信を体得してきたはずです。私たちも「自分のからだを持っている力でわが子を産み育てること＝自然分娩と母乳栄養」がお母さま方の出産・育児に対する自信に繋がると考えています。

さて、最近の当院での産科医療サービスの一端を紹介します。「自然で家庭的な分娩」を理念として、分娩では母子の安全を目指すことはもちろん、自然の力でのお産を支援しています。次に、出生直後のカンガルーケアや産後の母児同室を行い、母子の接触を通して自立哺乳の確立を援助しています。また夫の分娩立ち会いはもちろん、立ち会いまでは望まない場合でも陣痛室で夫が終日付き添えるようにし、出生後には分娩室で親子3人で過ごしていただくなど、家族の絆の形成を大切にしています。一方、快適さも大切ですので、産後の生活には心を配り、お母さま方が十分な休息をとれるようにお部屋を整えるなど工夫を凝らしています。まだ理想の姿には遠い面もありますが、今後もお母さま方が安心して出産し、その後の育児に備えられるように努めてまいりますので、よろしくご指導・ご支援をお願いいたします。

